

副詞一語文に関する意味と 自然さの計量的研究

小池 康

1. 序 論

副詞の中には、いわゆる陳述副詞のように、後続する成分にモダリティなどのある特定の意味機能を担った成分（以下、共起成分）を要求するものがある。しかし、実際の言語生活においては共起成分を後続させず、副詞が単独で用いられる場合も見られる。だが、このことによってコミュニケーションが阻害されるということはなく、これはこれでコミュニケーションは成立している。

本稿は、このような現象を踏まえ、現代における副詞の語形式自体の意味が日本語使用者においてどのように意識されているのかについて、副詞が談話での応答の際に一語のみで用いられた場面を設定した質問紙調査の結果を通じて考察するものである。あわせて、そのような副詞を一語のみで使用する用法に対する容認の違いについても調査・分析し、副詞の語形式自体の意味と共起成分とのかかわりについても考察する。

2. 副詞一語文の「意味」と「自然さ」に関する調査

2.1 調査の概要

調査は副詞が共起成分を持たずに一語で用いられている場合を設定し、当該の副詞がどのような意味を持つのかを聞いた(*1)。しかし、意味だけを聞いたのでは、それが実際に使われた場合に許容される用法かどうかという点で問題を残すことになる。したがって、それぞれの副詞を一語のみで応答として用いる用法が自然なものかどうかという点に関しても調査した。

2.2 調査語の選定

調査語の選定においては、まず予備調査を行なった。島本(1989)を参考に、副詞一語で発話される蓋然性が高いと筆者が判断した副詞18語を選定し、その18語より20の調査項目を作成し、それにより予備調査を行なった。本調査は、この予備調査の項目より「それほど」「べつに」などの「名詞+助詞」形式の副詞を調査対象外とし、最終的に14語を調査語とし16の調査項目を設定した(*2)。

本稿では、この16の調査項目のうち、疑問文に対する応答として副詞一語文が使用された場合を設定した13の調査項目（調査語は12語）について分析を行なうこととする。

調査語は以下の通りである。

あまり、かならず、さっぱり、さほど、すごく、ぜんぜん、たいして、たぶん、ちつとも、なかなか、なんとも、やっと

具体的な調査項目については、2.4.1を参照していただきたい。

2.3 調査対象

茨城県つくば市の公共住宅地域に居住する16歳（高校生以上）から80代までの男女。つくば市役所において、各年齢層100名ずつ（ただし、70・80代は合わせて100名）を層別にサンプリングして総数723名を選出し、留置調査法で行なった。その結果、調査用紙回収総数は455部（62.93%）で、うち有効回答用紙数は401部（55.46%）が得られた。

調査は、1994年3月から4月にかけて行なった。

2.4 結果と分析

2.4.1 結果

本調査での副詞一語文の「意味」と「自然さ」についての調査結果は、以下の通りであった。

図1 「意味」の平均値分布

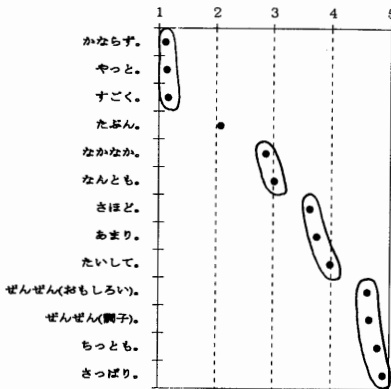
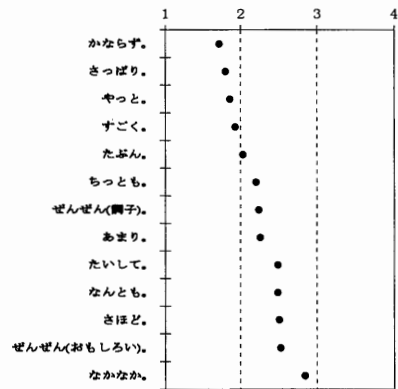


図2 「自然さ」の平均値分布



調査項目

A: 「テニスはうまいですか？」 B: 「あまり。」
 A: 「明日も来てくれる？」 B: 「かならず。」
 A: 「彼から返事はきたかい？」 B: 「さっぱり。」
 A: 「駅はここから遠いですか？」 B: 「さほど。」
 A: 「社、恥ずかしがり屋？」 B: 「すごく。」
 A: 「最近調子はどうだい？」 B: 「ぜんぜん。」
 <ぜんぜん(調子)>

A: 「映画、おもしろくなかったんだって？」 B: 「ぜんぜん。」
 <ぜんぜん(おもしろい)>
 A: 「このビデオはおもしろかったかい？」 B: 「たいして。」
 A: 「あなたは、来週、東京へ行きますか？」 B: 「たぶん。」
 A: 「この小説はおもしろかったかい？」 B: 「ちつとも。」
 A: 「テストのときはどうだった？」 B: 「なかなか。」
 A: 「今回の決定についてどうお考えですか？」 B: 「なんとも。」
 A: 「イスはできましたか？」 B: 「やっと。」

2.4.2 「意味」の分析

図1は、副詞一語で応答された場合の当該の副詞の「意味」を聞いたものの集計結果である。

この場合の「意味」とは、たとえば「あまり。」では、Aの発話に対してBが「あまり。」と応答したことで、Bはこの「あまり」という副詞一語に、プラス評価的な「自分はテニスがうまい」ということを意味させているのか、マイナス評価的な「自分はテニス下手だ」ということを意味させているのか、もしくはそのどちらとも言えない中間的な「自分はテニスがうまいとも下手とも言えない」ということを意味させているのか、のいずれの意味を持たせているのかということである。ここで注意していただきたいのは、「あまり」がこれら三つの意味形式と具体的に共起できるかどうかを聞いたものではないということである。この「意味」の調査は、副詞の語形式自体がどのような意味を持っているのかということを探めようとするものであり、副詞と共起成分との結びつきに主眼をおいたものではないことに留意していただきたい。

調査紙では、五つのカテゴリーの順序尺度で表わし、相対する意味を「1」および「5」に付し、中間的な意味を「3」に設定し、その五つのカテゴリーから適当と思われる番号に丸を付けてもらった。

横軸の数値は平均値(**)を表わしている。この数値は、「1」に向かうほど語形式自体の表わす意味がプラス評価（指向、性向などの意味も含む、以下同）の内容を意味するものであり、逆に「5」に向かうほど「ない」などの否定辞を含むか、もしくは否定辞を含んでいなくともマイナス評価の内容を意味するものである。「3」は中間で、「1」とも「5」とも言えないということである。たとえば「あまり。」では、「1」は「自分はテニスがうまい」、「5」は「自分はテニス下手だ」、「3」は「自分はテニスがうまいとも下手とも言えない」ことを意味している(*4)。図1における「あまり。」の平均値は3.75である。これより、「あまり」という副詞自体がややマイナス評価の意味を持つ副詞と意識されていることがわかる。

図1より、一語で用いられる副詞の意味すなわち副詞の語形式的な意味は、各副詞とも大まかではあるが定まっていると言えよう。各項目の平均値を「意味」の五つのカテゴリーにしたがってまとめてみると、以下のようになろう(*5)。

- 「プラス評価の意味」（1に近似した値）を持つ副詞
：「やっと」「すごく」など
- 「プラス評価傾向の意味」（2に近似した値）を持つ副詞：「たぶん」
- 「中間的な意味」（3に近似した値）を持つ副詞：「なかなか」「なんとも」
- 「マイナス評価傾向の意味」（4に近似した値）を持つ副詞
：「あまり」「たいして」など
- 「マイナス評価の意味」（5に近似した値）を持つ副詞
：「ぜんぜん」「さっぱり」など

ここで、「ぜんぜん」について言及しておく。「ぜんぜん」は、本調査では「最近調子はどうかだい？」／「映画、おもしろくなかったんだって？」という二つの発話への応答として設定した。「ぜんぜん」だけ二つの調査項目を設定した理由は以下の通りである。

「ぜんぜん」は、その共起成分に否定辞もしくはマイナス評価的な内容を取ると考えられていたが、近年では否定辞を伴わず、単なる程度副詞のように使用される例が多く見受けられる^(*)。筆者の内省では「ぜんぜん」はマイナス評価の強調の副詞であり、一語で用いられてもマイナス評価を表わすと意識しているが、近年のこのような傾向より「ぜんぜん」が一語で用いられた場合、その意味をマイナス評価の強調ととらえずにプラス評価の強調の意味としてとらえる日本語使用者がいるかもしれないという予測を立て、その実態を調べようと考えた。

そこで、まず「ぜんぜん(調子)」を設定した。これは、yes-noの応答ができないタイプの疑問文への応答という設定であり、BはAの発話(疑問)に対して「(調子が)良い／悪い」のどちらかの立場を示さなければならない。その時の回答が「ぜんぜん」一語のみであった場合、被験者はこの語の意味をどのようにとらえるかー「良い」というプラスの方向性でとらえるか、「悪い」というマイナスの方向性でとらえるか、もしくは「良くも悪くもない」といった中間的なものとしてとらえるかーを調べることにより、「ぜんぜん」の語形式自体が持つ意味をどのように意識しているのかが把握できるのではないかと考えたのである。

さらに、「ぜんぜん」がyes-noでの応答が可能な否定疑問文への応答として用いられた場合にどのような意味を持つと意識されるのかという観点より、「ぜんぜん(おもしろい)」を立項した。これは、もし「ぜんぜん」の語形式自体の意味がマイナス評価を表わすとすれば「つまらない」となり、プラス評価を意味すれば「おもしろい」という意味に結果が収束するであろうと考えたためである^(*)。

以上の設定によって、「ぜんぜん」の語形式自体の意味がどのように意識されているのかを見ようとしたのである。

結果としては、それぞれの項目で「悪い」「つまらない」といったマイナス評価の意味で用いられていると意識されており、これはそのままこの「ぜんぜん」の語形式自体の意味とみなすことができよう。これより「ぜんぜん」は、実際の言語使用においてはプラス評価の内容を共起成分に持つことはあっても、語形式自体の意味はいまだにマイナス評価と意識されていると言って差し支えないであろう。

2.4.3 「自然さ」の分析

「自然さ」の調査は、「1.自然」「2.やや自然」「3.やや不自然」「4.不自然」および「? . わからない」の五つのカテゴリーを設定し、「意味」同様適当と思われる番号に丸を付けてもらった。図2は、その「自然さ」の平均値の集計結果^(*)である。横軸の数値は、「自然さ」のカテゴリー「1.自然」から「4.不自然」に対応している。

各副詞に注目してみると、一語文での使用が比較的自然と意識される傾向にある副詞

もあれば、比較的 unnatural と意識される傾向にある副詞も見られる。前者には、「かならず」から「あまり」が含まれ、後者には「なかなか」が含まれよう。この「なかなか」は、2.4.2 では「中間的な意味」を持つ副詞であった。このことを考え合わせると、「なかなか」は「中間的な意味」を持つ副詞であるゆえ、一語のみで用いられると B の発話意図が明確には伝わらず曖昧になるため unnatural と意識されたのであろう。これは、同じく 2.4.2 で「中間的な意味」を持つ副詞である「なんとも」と対照的な結果である。このことは、「なかなか」は語形式自体の意味が曖昧であるということがマイナスに働くのに対し、「なんとも」はそれほどマイナスには働いていないということを示しており、この両語の使い分けがなされていると言えよう。また、「たいして」から「ぜんぜん（おもしろい）」は、平均値が 2.5 に近似した値を見せており、自然とも unnatural とも言えないと意識されていることがわかる。

3. unnatural の場合の適格表現の選定傾向

2.4.3 で見たように、本調査で対象とした副詞は、一語で使用しても比較的 natural と意識される傾向にあるもの、比較的 unnatural と意識される傾向にあるもの、そしてどちらも言えないものといった三つのパタンに分かれた。このうち特に後の二者については、どのように表現し直せば自然な表現と意識されるようになるのかといった疑問が生じてくる。そこで、本章では、副詞一語文での使用が unnatural であると感じられた場合、当該の副詞にどのような成分を共起させて発話すれば適格な表現となるのかという観点より、副詞の語形式自体の意味と共起成分の関連を考察する。

3.1 調査概要

2.4.3 の「自然さ」の調査において、各調査項目を「自然さ」のカテゴリーの「3. やや unnatural」「4. unnatural」と回答した場合に限り、B が当該の副詞一語文をどのような表現形式に直して発話すれば natural と意識されるようになるのかということを調査した。その際、予備調査での回答例を参考に「unnatural の場合の適格表現（以下、「適格表現」）」として、当該の副詞とともにプラス評価の内容と共起させた文やマイナス評価の内容と共起させた文などを各調査項目ごとに 4～6 文ずつ掲げ、その中から選択してもらった。もしその中に適格と思われる表現がない場合は、「その他」に自由記入してもらった。「適格表現」は複数選択を可とし、妥当と感じる表現ならばすべての「適格表現」を選択することもできるようにした。

本章では、13 の調査項目のうち、図 2 において副詞一語文での使用が比較的 unnatural と意識される傾向の見られた調査項目—なかなか—と自然とも unnatural とも言えないと意識された調査項目—たいして・なんとも・さほど・ぜんぜん（おもしろい）—の計五つの調査項目についてその結果を示し、分析を行なう。

3.2 結果

対象とする5つの調査項目における「3. やや不自然」と「4. 不自然」の場合の選択した「適格表現」の回答者数を χ^2 検定にかけた結果、有意差(p<5%)は認められなかった。これは、「自然さ」の判定が「3. やや不自然」「4. 不自然」にかかわらず、「適格表現」の選択が同一の傾向にあることを示している。

また、調査項目の各「適格表現」間での χ^2 検定の結果、すべてに有意差が認められた。

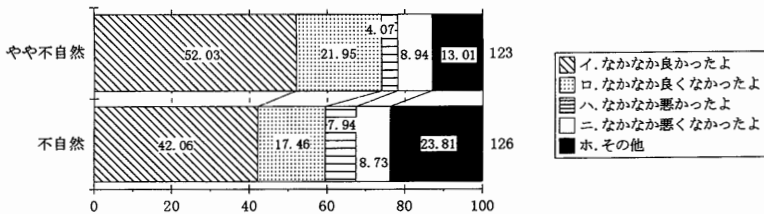
3.3 分析

本節では、五つの調査項目のそれぞれの副詞において、選択された「適格表現」の比率図を示しつつ、考察を加えていく。なお、図3から図8の比率図における適格表現のイとハは、共起成分に否定辞を伴わないもので、線状の模様で示した。これに対し、ロとニは、否定辞を伴った共起成分を持つもので、白地もしくは点地の模様で示した。なお、「その他」は黒地に統一した。また、各グラフの右端の数字は回答者数を表している。

3.3.1 なかなか

図3 「なかなか」の比率

調査項目 A: 「テストのできはどうだった？」 B: 「なかなか。」



「なかなか。」は、図2において「自然さ」が一番低かった項目である。図3より、「3. やや不自然」でも「4. 不自然」でも「イ. なかなか良かったよ」が有意に高比率な結果となって現われた。服部(1994a)では、「ない」が付くか付かないかによって、「なかなか」を二つの用法に分けている。「ない」が付かない用法での共起しやすい述語のタイプとして、「語彙的に肯定的な評価を含む(その属性を有することが望ましいとみなされる)述語、または、文脈などから臨時に肯定的に評価される述語」を挙げている。本調査では、テストの出来を聞く疑問文への応答という設定だが、得られた結果は肯定的な評価と言える「良かった」と共起させた選択肢への回答が多く、結果的に服部の主張を裏付けるものとなった。一方、服部(1994a)には、形容詞述語は「ない」が付く用法では共起しづらい述語のタイプであるという指摘もあるが、この点からすると「ロ. なかなか良くな

かったよ」という選択肢の比率が高いことには違和感を覚える(*9)。

また、「その他」の回答が「3. やや不自然」で13%程度(実数にして16名)、「4. 不自然」で24%程度(同30名)見られた。「その他」へ自由記入された回答には以下のようなものがあつた。

- 「なかなかむずかしかった」…「3」：5名、「4」：7名
- 「なかなかできなかったよ」…「3」：4名、「4」：5名
- 「まあまあ(できた)」…「3」：2名、「4」：3名
- 「あまり良くなかった」…「3」：1名、「4」：2名

これらは回答の中で比較的多く見られたものであつて、すべてではない(*10)。

上記の結果を見ると、自由記入としても当該の副詞「なかなか」を含んだ表現を作成しており、その意味で被験者が妥当と思う「適格表現」が選択肢の中にたまたまなかつただけで、基本的には「なかなか」を用いて適格な表現が言いうることがわかる。

以上のことより、「なかなか」は、その語形式自体の意味は「中間的な意味」と言えるが、一語文での用法は必ずしも自然なものであると意識されているわけではない。むしろ共起成分を伴った用法が指向されると考えられ、その場合はプラス方向に評価するような内容を共起成分としてとる傾向があると言える。しかし、その場合でも後述の「さほど」や「たいして」ほどには、共起成分のタイプが一つに特定されているとは言えない。そしてこれは、2.4.2において同じく「中間的な意味」を持つとされた「なんとも」とも対照的である(3.3.4参照)。

3.3.2 さほど・たいして

図4 「さほど」の比率

調査項目 A：「駅はここから遠いですか？」 B：「さほど。」

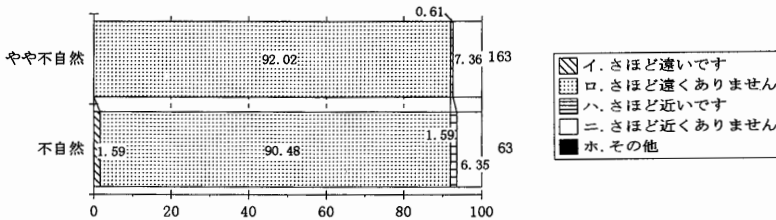


図5 「たいして」の比率

調査項目 A: 「このビデオはおもしろかったかい？」 B: 「たいして。」

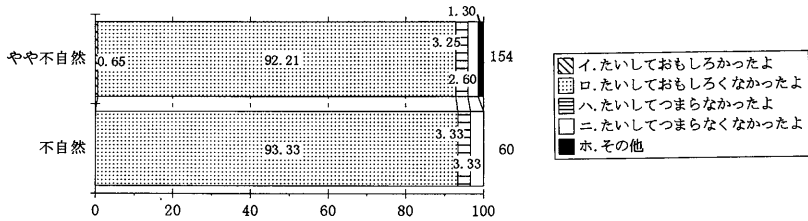


図4の「さほど。」も図5の「たいして。」も、一つの「適格表現」の占める割合が「3. やや不自然」「4.不自然」とともに9割以上を占めている。この両項目の「適格表現」に共通しているのは、否定辞を含んだ成分であるという点である。つまり、「さほど。」では「ロ.さほど遠くありません」が、「たいして」では「ロ.たいしておもしろくなかったよ」が高い回答率を示している。

これらは、たとえば「たいして。」における「ロ.たいしておもしろくなかったよ」の共起成分は、「ハ.たいしてつまらなかったよ」の共起成分と意味的には同じであると言える。しかし、「たいして」と共起する成分として適格と意識されているのは、「つまらない」というマイナス評価の内容を持つ成分よりは、「おもしろくない」のように具体的な否定辞を含んだ形式の成分であるという意識が強いことがわかる。服部(1994b)では、「たいして」は否定辞と共起する用法しかもたず、また、共起成分になりうるものとして程度性を持つ述語であると述べている。そして、本調査項目のような「おもしろい一つまらない」といった対照的な意味を持つ述語の場合、望ましいという評価をもつ語と共起しやすいと述べている。本調査での結果は、この主張を裏付けるものとなった。

「さほど」も、辞書類(*)の記述では否定辞を伴う用法のみとされるが、本調査の結果も「ロ.さほど遠くありません」が最も多く、次いで6.3%と7.3%の割合で「ニ.さほど近くありません」が回答されていた。ここでは「遠い—近い」という対照的な意味を持つ述語を共起成分としたが、「近い」という共起成分への回答は1割にも満たないのに対し、「遠くない」という共起成分への回答は9割以上を占めた。これは、調査項目文におけるAの発話が「駅はここから遠いですか？」と述語成分に「遠い」を取っているため、その影響を受けてBの「適格表現」の述語成分も「遠い」になったのではないかと考えられる。

以上のことより、図1の結果と合わせて結論づけると、「さほど」も「たいして」も語形式自体の意味は「マイナス評価傾向の意味」であり、また共起成分も具体的な否定辞を伴ったマイナス評価の意味内容を持つ成分をとると言える。その意味で、語形式自体

の意味と共に起可能な成分の意味的な連続性が認められると言えよう。

3.3.3 ぜんぜん (おもしろい)

図6 「ぜんぜん (おもしろい)」の比率

調査項目 A: 「映画、おもしろくなかったんだった?」 B: 「ぜんぜん。」

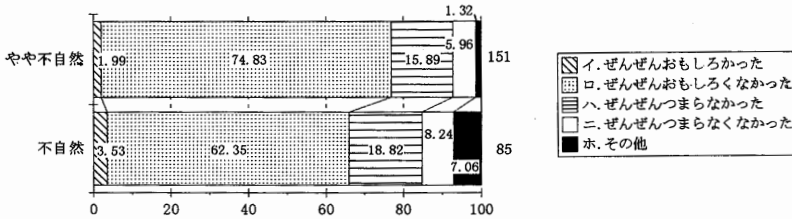


図7 「ぜんぜん (調子)」の比率

調査項目 A: 「最近調子はどうだい?」 B: 「ぜんぜん。」

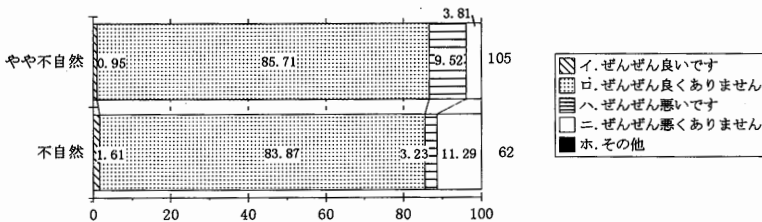


図2において、「ぜんぜん (調子)」は一語文での使用の自然さが2.24と比較的自然と意識されていることがわかるが、「ぜんぜん (おもしろい)」は2.53と自然とも不自然とも言えないと意識されているという結果が得られた。「ぜんぜん (おもしろい)」の「適格表現」を調べてみると、図6より、否定辞を伴った「ロ. ぜんぜんおもしろくなかった」において、「3. やや不自然」で75%弱、「4. 不自然」で60%以上の回答が見られ、「ぜんぜん」の共起成分としては否定辞を含んだ表現が適格であると意識されていることがわかる。否定辞を伴わないがマイナス評価の意味内容を持つ「ハ. ぜんぜんつまらなかった」も「3. やや不自然」で16%近く、「4. 不自然」でも19%近く見られた。これらに対し、2.4.2での筆者の予測を反映した「適格表現」の「イ. ぜんぜんおもしろかった」は、「3. や

や不自然」で2%弱、「4.不自然」で3.5%程度と少なかった。

また、参考として挙げた図7においても、「良くありません」「悪い」といったマイナス評価の意味を持つ成分と共起させた回答が多かった。

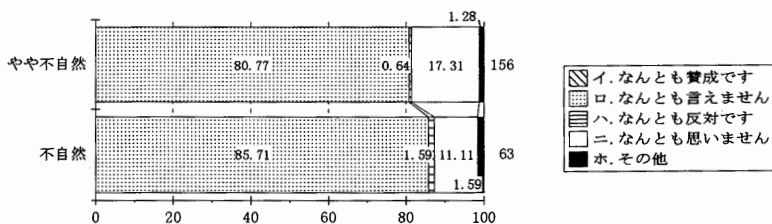
これらのことより、近年「ぜんぜん」は強調の副詞的な用いられ方がなされるが、それでもいまだにマイナス評価を共起させるのが適格であるという意識が存在していることがうかがえる。そして、そのマイナス評価の中でも、マイナス評価の「内容」よりも「ない」などの具体的な否定辞（否定の「形式」）を共起させたほうが適格だと意識している被験者が多いこともわかる。

この「ぜんぜん」においても、先の「さほど」や「たいして」同様、語形式自体の意味と共起可能な成分の意味的な連続性が認められると言えよう。

3.3.4 なんともし

図8 「なんともし」の比率

調査項目 A: 「今回の決定についてどうお考えですか？」 B: 「なんともし。」



「なんともし」は、「なかなか」同様、2.4.2で「中間的な意味」と位置づけられた副詞であるが、「適格表現」を見ても「ロ. なんともし言えません」や「ニ. なんともし思いません」といった中立・中間的な立場を表わす述語と共起していることがわかる。これらのことより、「なんともし」はその語義自体が中立的な立場を示すものであり、その共起成分も中立的な立場を示すものでなければならない副詞であると言えよう。

以上のことを踏まえ、「なんともし」と「なかなか」の違いを簡単に述べておく。まず「なんともし」は共起成分に評価的なニュアンスを持たない中立的な内容を持つと言える。これに対し「なかなか」は、共起成分に（主にプラス方向の）評価を持つものをとると言えるであろう。

4. まとめおよび今後の課題

副詞の語形式自体の意味および副詞の共起という観点から、副詞一語文における副詞の意味およびそのような用法の自然さを調査した結果、副詞の語形式自体の意味はほぼ

決まっているということがわかった。また、副詞一語文の使用については、一語で使用しても自然と意識される副詞、不自然と意識される副詞、そのどちらとも言えない副詞の三つに分かれたが、後の二つのタイプの副詞について行なった「適格表現」の調査を見ると、副詞一語文での使用が不自然と意識される傾向にある副詞であっても、当該の副詞を用いて適格な表現を生み出しようということがわかった。そして、その場合の共起成分を見ると、各副詞の語形式自体の意味と関連した意味内容の共起成分をとる傾向にある副詞が多く見られた。このことより、副詞の語形式自体の意味とその副詞に共起可能な成分とは意味的に関連していると考えられる。逆に言えば、そのような関連が裏付けとなって意識されているからこそ、図2での「かならず」から「あまり」は、一語文での使用が許容される傾向にあるのだと考えられよう。

本研究における残された課題としては、本調査で対象とした各副詞一語一語に対する詳細な分析の必要性が挙げられる。特に、図1において「プラス評価の意味」としてまとめた副詞群には問題が残る。たとえば、「かならず」は、本調査ではプラス評価の副詞に位置づけられる結果となった。しかし、先行研究をみると、「かならず」は「事態が実現する確率の高さがほぼ100%であることを示す」という意味分析がなされている(工藤1982、坂口1996)。この意味分析は、「かならず」がプラス評価の意味しか表わさないということを示すものではない。このような問題を解決するためにも、各副詞ごとに焦点を当てた調査・分析を行なう必要性があり、そうすることでより厚みのある副詞研究が可能になるように思われる。

【注】

- * 1 調査は、副詞の語形式自体がどのような意味を持つと感じられるかを調べたものであり、プロソディックな違いや非言語行動を伴った場合などは設定していない。確かに、これらによって副詞の意味に違いが生じることは十分に考えられる。しかし、これらはまず副詞の語形式自体がどのような意味を持っているのかといった根本的なことを踏まえた上での議論となろう。本稿は、その根本的な部分に焦点を当てたものである。
- * 2 本調査で対象とした副詞の語数は少ない。これは、本稿で対象とした副詞一語文の意識調査の他に、共起成分の違いによって副詞に対する自然さの意識がどのように変わるかという調査(29語78調査項目)も併せて行なったためである(この調査の一部は小池(1996)を参照)。また、語数を限ることで、多面的な調査・分析を試みようとしたためでもある。
- * 3 平均値の算出法は、意味の五つのカテゴリーにそれぞれ1から5の得点を与え、各カテゴリーの回答者数と掛け合わせる。そして、その総和をカテゴリー数5で割った値が平均値であり、それは当該の調査項目がどのような意味として意識されているのかを示す指標となる。
- * 4 「さほど」は、「1」に「遠い」を、「5」に「近い」を設定した。また、「ぜんぜん(おもしろい)」は、「1」に「おもしろかった」、「5」に「つまらなかった」を設定した。
- * 5 ここで五つのタイプに分けられた各副詞が、これまでの国語学・日本語学における副詞の分類どのように一致し、どのように異なるかについても考察する必要があるが、それは今後の課題としておきたい。
- * 6 特に10・20代の若年層においてプラス評価的内容と共起させて使用される例が見受けられる。現に、筆者がこの調査と同時に行なった、副詞に肯定辞(非否定辞)／否定辞もしくはプラス評価的成分／マイナス評価的成分のそれぞれを共起成分としてそれぞれの共起成分の間で自然と意識する割合にど

のような違いが見られるかという調査でも、若年層は「ぜんぜん大丈夫だ」のような表現を自然と意識する傾向にあるという結果が得られた（詳細は小池(1996)を参照）。

- * 7 Aの発話における命題との論理的なかわりも考慮に入れるべき問題であろうが、本稿は副詞の語形式自体の意味を見ようとするものであり、論理関係上からのアプローチは考察外とする。
- * 8 「自然さ」の平均値の算出法は、「意味」の場合と同じように、「自然さ」の四つのカテゴリーにそれぞれ1から4の得点を与え、各回答者数と掛け合わせる。その総和をカテゴリー数の4で割ると「自然さ」の平均値が出る。
なお、「わからない」の回答は除外してある。それは、本調査での「わからない」は調査項目中に未知の単語がある場合に限り選択するように指示したため、「自然—不自然」の同一線上に設定していないためである。
- * 9 注2で述べたように、本稿での調査とともに共起成分の違いによって副詞に対する自然さがどのように変わるかという調査も行なった（以下、この調査を「共起調査」と呼ぶ）。ここでは「なかなか」も調査対象とし、「この料理はなかなか {おいしい/おいしくない} よ」「この料理はなかなか {まずい/まずくない} よ」という四つの調査項目で、それぞれの自然さを調査した。結果は、「この料理はなかなかおいしいよ」のみが自然と判定された。この結果を本稿での調査結果と比較すると、本稿では「ロ. なかなか良くなかったよ」という選択肢が15~20%程度の比率で出現しており、「共起調査」の結果と食い違っていることがわかる。本稿の調査では、「3. やや不自然」「4. 不自然」とも20人以上の被験者が「ロ」を選択していることとなり、単なる勘違いとして片づけてしまうには多い人数である。この食い違いの原因の一つとして、調査の性質の違いに起因した、副詞と共起成分の結びつきに対する被験者の焦点の当て具合の違いが考えられる。つまり、「共起調査」は共起成分の違いによって副詞の自然さがどのように変わるかに焦点が当てられた調査であり、被験者は副詞と共起成分の結びつきに強く焦点を当てていると考えられるが、本稿の調査は必ずしも副詞と共起成分の結びつきに焦点を当てているわけではない。この点に関する違いが、食い違いの原因となって現われたのではないだろうか。
- * 10 他の形式として多く見受けられたものには、応答辞（「はい」「ええ」「いいえ」など）のみの回答であった。
- * 11 島本(1989)、森田(1989)、飛田・浅田(1994)、『使い方の分かる類語例解辞典』（1994）。

【参考文献】

- 梅林博人 1994 「副詞『全然』の呼応について」『国文学解釈と鑑賞』59-7 至文堂
- 1995 「『全然』の用法に関する規範意識について」『人文学報』266 東京都立大学人文学部
- 工藤 浩 1982 「叙法副詞の意味と機能—その記述方法を求めて—」『研究報告集—3—』国立国語研究所報告71
- 小池 康 1996 「辞的成分と共起する副詞の計量的研究」『日本語と日本文学』22 筑波大学国語国文学会
- 坂口和寛 1996 「副詞の語彙的意味が統語的現象に与える影響—働きかけ文での共起関係を中心に—」『日本語教育』91
- 島本 基 1989 『日本語学習者のための副詞用例辞典』凡人社
- 服部 匡 1994 a 「副詞『なかなか』の意味用法の分析」『言語学研究』13 京都大学言語研究会
- 1994 b 「『大して(～ない)』、『大した』について」『学術研究年報』45-4 同志社女子大学
- 飛田良文・浅田秀子 1994 『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 森田良行 1989 『基礎日本語辞典』角川書店
- 『使い方の分かる類語例解辞典』1994 小学館

(こいけ やすし 筑波大学大学院 博士課程 文芸・言語研究科応用言語学)